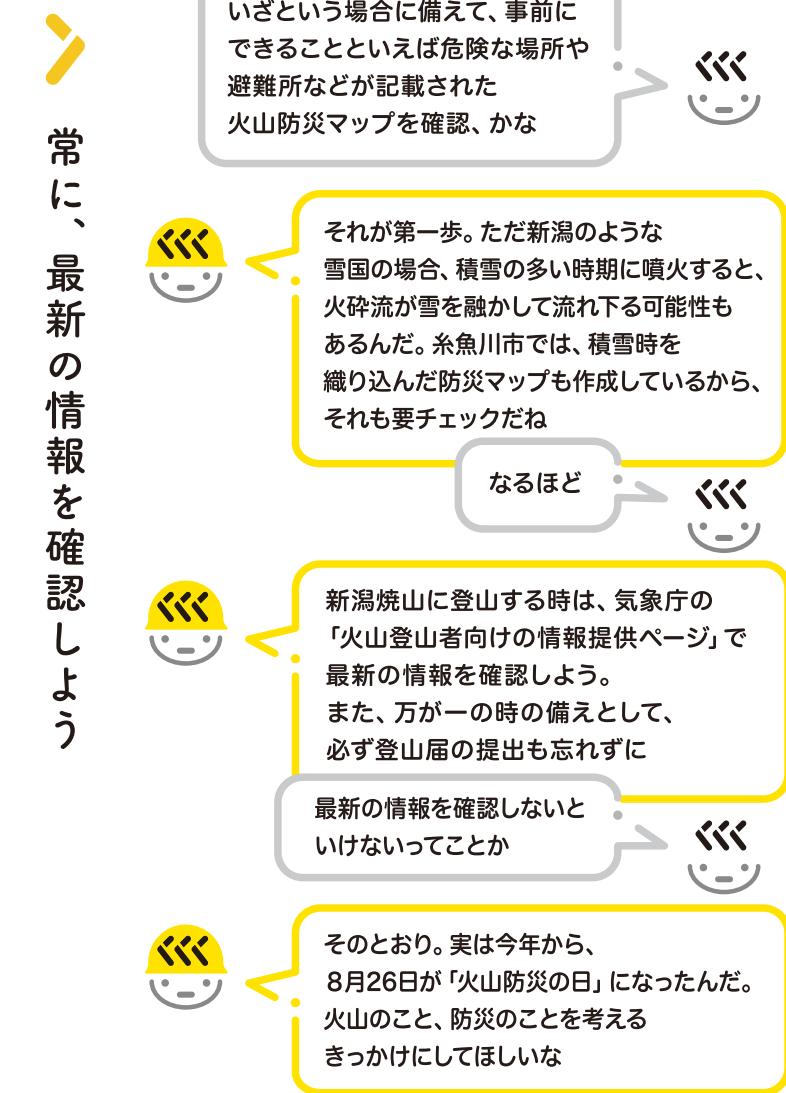
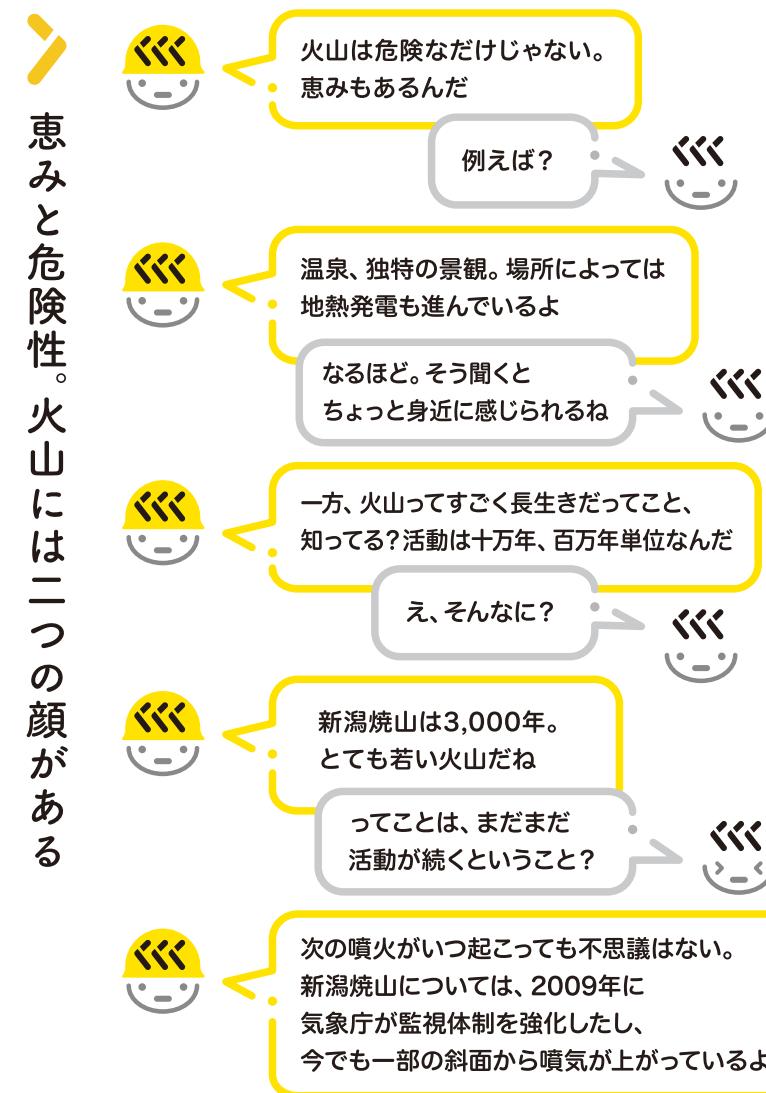
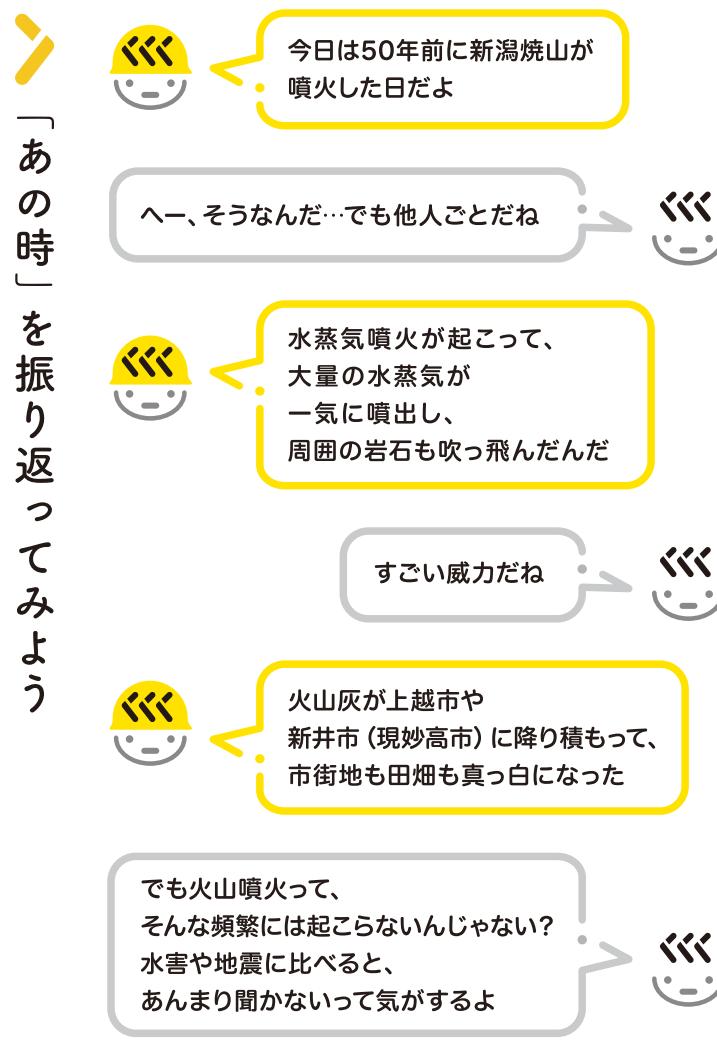


火口群からの水蒸気噴火 噴石で3人が死亡

1974(昭和49)年7月28日2時50分頃、新潟焼山山頂付近の割れ目の火口群で水蒸気噴火が起きた。噴石が半径800mの範囲に落下し、付近にいた大学生3人が死亡した。噴出した推定約65万トンの火山灰は、山麓の市街地等に真っ白に積もり、160km以上離れた福島県まで到達した。新潟焼山は、今から1,000年ほど前に最大規模の噴火・爆発が起り、現在も活動が続いている。

写真提供：新潟日報社

記憶を大切につないでいく。他人ごとから自分ごとへ。



つなぎだ記憶がモミモを救う 防災・減災 にいがたプロジェクト 2024



写真提供：新潟地方気象台

灰が積もった車

写真提供：新潟地方気象台

自分ごとにして「わが家」の防災力を上げよう！

Check!
その3

防災を 習慣づけよう

日常に「さりげなく」防災を

安全や防災を習慣化するには、普段の生活中に紛れ込ませることです。例えば車の燃料は2分の1になら入れる。水や缶詰は「備蓄」のためにわざわざ買い揃えるのではなく、普段の買い物の中で多めに買って古いものから使う。そうすれば、自然とローリングストックも実現できます。備蓄とは、特別なものを用意することではありません。日常的に使うものを多めに置いておく。それでいいのです。

年に一度は「家族防災の日」

家ごとに「防災の日」を決めるのもおすすめです。例えばお父さんの誕生日として備蓄品の点検、緊急連絡方法の確認、避難経路のシミュレーション、家具や電化製品の固定の点検を行

うなど。わが家では子どもが小さい頃、家族で近くの親戚まで歩いてみたことがあります。もしやすると、子どもだけで避難しなければならないかもしれません。そう考えて危ない箇所などを確認し合うのです。親戚でなくても、友だちの家をお互いの避難所としてもいいでしょう。

形式的な備えを「実質的」にしよう

家具の固定については注意点があります。「固定具を付けているから大丈夫」ではありません。過去の例では、突っ張り棒が和室の天井を突き破ったことがあります。天井の強度によっては、当て板をしてさらに両脇を器具で留めることが必要です。家具の固定だけではなく、備蓄も防災器具もしっかり機能させるには「今夜起きるかもしれない」という意識であたることです。

山村 武彦 氏
1964年、新潟地震でのボランティア活動を契機に「防災システム研究所」を設立。以来50年以上にわたり国内外で発生する災害の現地調査を実施。多くの企業や自治体の社外顧問等を歴任。BCPや防災マニュアルの監修、現代ビジネス（講談社）での連載のほか、著書も多数。

新潟焼山火山の噴火では、160km離れた福島県でも灰が降ったという記録が残っています。風向きによっては、あるいは仮に台風に重なれば、灰の降る範囲が360度に及ぶかもしれません。火山災害は、気象条件によって被害が変わってくることを、覚えておいてください。



新潟焼山火山防災講演会

- 令和6年8月25日 [日] 13:00～15:30
- ピーチホールまがたま 糸魚川市寺町
- ワークショップ/パネル展示/基調講演会/パネルディスカッション

お問い合わせ 新潟県防災局防災企画課 詳しくはこちら

tel 025-282-1605

参加無料
事前申込不要